雪里草

大和田建樹作

大和田建樹作

いろは歌 全

東京

中央堂發兌

自序

今はむかし、わが十三ゝ年なりき、始めて歌つくり試みて宍戸千建といふ老人に見せたるを、老人より父に告げられて、武士のすべき武藝もせずして公卿方免きたる遊びをするとて、きびしく叱らきたることあり、またその頃、詩語碎金がほしきといふを許されざりしこゝもありけり、かくゆるされぬ道なれども、書籍も師匠も得ることあたはず、ある時は百人一首の頭書をそらんじ、ある時は神社にまうでゝ繪馬にしるせる歌を

讀みおぼえなどしつゝ、ひそかゐ學びし年月を
おもへば、茫然として夢のやうなり、いまこれ小
冊子を公にせんとて草稿ゐかゝれば、歌書に自
由ゐかたはらに積まれてむつましく詞をかは
し、父に笑顔よく隔てぬ燈火の影にかたきり、う
れしきにつけても恥づかしきに、童ごゝろに豫
想せし十が一つの上手にも至りのぬることよ、
十五の年の春ゐやありけん、　するゐゝに硯
の墨におくられど成らぬ言葉の道ぞかなしき
と、詠ぜしをりもありしを、きりとて思ひすてな

んにゐが志からねば、ひろく世の批判をえてぞ
改むべきは改め研くべ𡚁はみがゝんとて、をこ
がましくも自らすゝゐでたるのみ、わき既ゐ
一人の師なし、あゞ万人れ師をえんことをこそ

明治廿一年十二月　　大和田建樹
　　しるす

目録

少女は望……一丁
春の夜……二丁
海のあなた……四丁
籠の鳥……六丁
別れしあと……八丁
あるみどり……十丁
人まつほど……十丁
海邊の歌……十丁
おでしこ……十丁
歸鄕の前……十丁
ほたる草……十丁
瀧……十一丁
山里まて……十二丁
夕れ空……十五丁
おごりの花……十七丁
……十九丁

秋のかたみ……三十三丁
夕雲……三十四丁
あらき……三十六丁
かたみの琴……三十九丁
千鳥……四十一丁
かへらぬ影……四十三丁
少女の死……四十五丁
冬の月……四十七丁
春の歌（四首）……五十二丁
夏の歌（二首）……五十三丁
秋の歌（五首）……五十四丁
冬の歌（二首）……五十六丁
雜の歌（四首）……五十六丁
小兒の病み居ける頃（二首）……五十八丁
旅日記の中より（五首）……五十八丁

少女れ望

うつくしきその望
花の蕾をあらはして
少女の胸ふ笑みそめぬ

雨も嵐もけさはあゝ
色香をはゝる愛の友

うつくしきその望
眉あたらしき三日月や
かをむ顔よ
夕暮ごとまさりゆくゝやきぬ

影に未来を照らしつゝ

うつくし死それ望
雲雀羽をうちひろげ
下り元上りもはだ知らぬ
むのふよ空れ海原よ
かなゝゝ星のほの見えて

春れ夜

春風さむくそよふけて
火影またゝく窓のもと

ゆきのむせび
机よりて離れぬ姿
何いつのまゝ戀人は
ゆがぬ歌きゝて来りしか
けしき身ゝしむ朧夜よ
ふるて霰かゝら雪か
ほろてちらり
軒端ゝ近くひらゝく影ゝ
ゆもて舞てんゆ戀人の
今宵何くがれ来りしか

梢はおれて更けゐる
月よすみゆく鐘れ聲

人ゐゐづこ
歌へばかはを水れ間の調

何い戀人ゐちる花の
なごり踏まんを訪ひ来しか

海れ何かと
いさり火遠く見えそ消て
沖よりよをる暮の色

なかば夢路をすぎをりし

たび社月日もいま幾日
あゝ戀し海の何かた

親子うちつを岩かげを
おくれを歸る海士小舟
あすの日和の外にまた
ものおえむなき生涯や
あゝ戀し雲れあかた

こゝろ千里の旅びをを
寐らをぬ夜の友とてゐ
ゐつまで吹くか春れ風

海れあなた

まくらをたゝく波の聲
あゝ戀し家なるひと

籠の鳥

有明月のかげきえて
まどはやう〳〵白みゆく
草のまくらを起きはなれ
空ふうたはん時はいま
いさむ翼をゐかまはせん
雲まを入るべ丸みちたえぬ

朝日いまもふるさゝの
すみれの露ふ匂ふらん　野邊より野邊を色どりて
昨が夜はてなき天れ原　友の羽がひを照らすらん
聲もゞめぬ我戀ひて　神れあたへし庭ゐるを
戀しやおもし水の音　まよふか母ゐ草かげに
歌ひし外ゐおぼえゐ丸　あゐ丸夢みぬさきゐらば

囚れわが身いつまでぞ

あれふぞみゆる空ごしふ
野寺の塔のくもかをみ
いはねおよばぬよそれ空
うらやましきは春れ風
あはれ慈悲ある少女子よ
親子れ情は已きれゆか

別を去るのと

春風は吹きすぎぬ

かがきふれこる波れ花
うぐむすは飛び去りぬ
こゝろつゞく歌れ聲
わかれし君よわが胸を
はるきぬ影はおほ何れる
水鏡しても何ぞも
わたるしは何の小川
語るともなくうちつれて
やすみしはあの木蔭
君がひたひはかゞやかし
夕日れ雲はおほ何れる

わのみどす

誰が琴のしらべかまじる
わか緑おほふ木蔭を

はしりくる水もかつかト
花つみよあひし少女の

面影はいまもみゆるを
まぼろしよ今も浮ぶを

春かへり梢をげりて
人とほく里へだいりぬ

あはきその吹きくる風よ

言とはん夢とすぎふし
春のゆくへを

人まはやど

村雨のはきゆくそらよ
ほゝぎす一聲なきつ

橘のはなちるかたよ
よついつゝ螢ともしぬ

心ゆく夜よもあるかな
契りおきし人待つ宿の

つきぐを取ぐさ充がてら

人はやど

苔清水むをびて来んぞ
庵の外れ畔みちづたひ
わがゆけば松の葉ごしに
月もれぼりぬ

海邊の歌

をどれ波
自然の鼓うちつきて
疲きぬ拍子ふみつきて
ふざとびこえよわが上を
浮くも沈むもたゞに

うをよ波
うちてくだけて捲きゝへる
力はよきは伐はや遠く
すは〳〵来るぞ又一つ
負けじ岩根に身をよせて
かへれ波
人影もおきそらのうみ
洗ひはてゝは又磯に
おつる雷ちるあられ
波かわが身か神の手か

よせよ波
よせくる雪の遠山に
かしらを裂けて吹ゆる聲
あるや呑まきて一口に
いるか白蛇のはらのうち
いつまでも
汝が懷に身をよせん
あすも樂しく待てよ波
紀のふの恐けふの愛
底も一つの汝がこゝろ

おでこ
少女子が朝ふむ庭に
笑の眉ひらくなでしこ
白露をおみだとうけて
立てる色たきにか似たる
ちからおき少女のゆびに
その涙うちはらはせて
起きかへりあぐる面にの
その匂たきゆか似たる
去りがてゆ花の所たりを

とぶ蝶よふづれに花の
品定する

歸郷れ前

わが屋をおほふ椎一木
ながきみ垂きて晝さむく
手飼の犬れ水飲みま
下りゆく姿はや失せぬ
あゝこひし
そのあたり

菫つみていやすみたる
うしろの岡の兜岩
かゝらぬ愛よわが友よ
これぞ心ま消えぬ影
いざいかん
ふるさとま

しむし小川ま沼ひゆけば
松原盡きてまへゝ海
魚とる舟もおがむべし
干潟の貝もひろふべし

あゝたのし
そのけしき

父をたすけて夕ごとに
水そゝぎたる朝顔も
このごろはらんその盛
あすの笑顔をけふゝ夢
あゝこひし
あゝこのし

南風ふきいる窓のもと

軒端の鈴をきゝながら
よみてくらせん母上の
このませたまふ小説を
何ゝたのし
求んつきひ

夕やけ雲のそらたかく
かへる鳥の三つゝつゝ
何れと見上げて指さしゝ
いもとゝ今年はや七つ
いざきかん

あとふりむけば送り来し
兄の御顔のかくれたる
湊のきしのふる柳
うらみ恋きてあすゝ見ん
あゝうれし
あゝたのし

そのこゑを

耳ゝおれたる里謡の
ひゞくあかたぞ叔母の門

そよぐ青田の波間より
はやあらいれよ招く手れ
あゝこひし
いざいなん

ほたる草（月草ともいふ）

晴れわあるみそらの色ゝ
装してたてるをとゑよ
谷川のくさむがくきゝ
見えかくきゝおびく姿よ

香にふほひ時をくはなを
よそふ見て垂れよす眼よ
ゆく水ふ裾をひたして
涼しげふうち笑むさまよ
里の子がほたるとよびて
うつくしむ少女ぞ汝ぬ
歌人の月とおづけて
えてはやすをとをぞ汝ぬ
れくりけん愛のしるしか
朝霧の手づからかけし
露の白玉

瀧

解きみだしさらせる布よ
かせる掛け繰を引く糸よ
やまひをのこゝや機殿
しろたへの簾ぞおろす
おかばより谷ぬ絶たをて
ふかみどり影もうつらず
汝ひぞり
世ようつくしき
ものぬありけり

一時ふ落つるいかづち

千軍のひづめのひゞき
山ゝ裂け岩ゝくだけて
わが上を今も打つか
吹きおろす松の嵐も
汝が路ふるれば消えて
汝ひとり
世ふこゝちよさ
ものゝありけり
白雲のそらよりおちて
うたふ聲つゞみうつ聲

この山をつくりし神の
神代より變ゝらぬ調
流行をゆく手まもさはらで
あめつちの板まぞ合ゝす
汝ひとり
世ふ心たかき
ものゝありけり

山里にて

ゑどりしたゝる軒の山

變化つねなきまどの雲
朝日をそらよ躍らせて
うたゞ忘かれぬ谷の水
造化の腕にわがこゝろ
とらへてこゝはや幾日

目ざむる乳兒の枕ふに
柳のまはすかざぐるま
やねふともとぶ山鳩も
馴れてい言葉かいすらん
幼心ともえそむる

造化の愛にはやふくへ

薄の波の穂がくまよ
たゞうちまねく夕風の
浮き沈みもる女郎花
垣根づたひよりかれ来て
袖さはぐの野邊の秋
あとみかへきい妻も子も

夕れ空

うつくしの空の色

入日のあとよくれなゐの
羽をひろげてゆく雲に
誰がおもかげを畫くらん
あゝあゝ戀し人

おもしろの空のさま
色いやう〳〵消えゆきて
ちぎれちぎれよ散る雲の
とばりをのぞく月の顔
あゝあゝ戀し人

おつかしの雁の影
友うちつきてあの空を
こゝろのゆいふ渡るぞや
自在のつばさ樂しき身
あゝあゝ戀し人

なゞされ花

黄むみゆく草をちからよ
なほたのむ朝顔何ゐれ
色うすく身も痩せがれて
さきのこる一花あゐき

のぼる日に花ふむこのへど
まむゆしと顔もそむけず
老ふはてし秋のかきねを
いまもなほ杖とぞたのむ

咲きそめし汝が世の始
かゝらんを誰おもひきや
同胞もともゝ志ぼみて
たすけなき一花あはれ

有明のつきのしづくを
身ふかくる玉をよそゝひ

閉くろいぬ笑顔をゝげて
世まる立ちし朝をありしを

吹如あるゝ夜半の嵐まる
その夢はよしやぶれても
やぶられぬ花笠みせて
ほこり閉る朝も何りしを

たよりつる薄はあふまを
去たしみし小蝶は失せぬ
時々まる落つる木の葉も
なごをれ花

身をうちてよそゝぐ過ぐる

敵と見し日のひかりさへ
けふはその命となるゝ
親と見しきのふの露は
身をころを霜ぞのいれり

あはれその花のみかし兒
あはれその榮花のおごり
さきだつも殘るもおばし
いざねむき神のたまへる

秋弦のゝこゝ

土れまくらゝ

童男子ら掃ひ捨てそ
わが門ふつもる紅葉は
秋風のおきつるおごり
霜の上を照らす日かげゝ
ぬきかへる色もうつくし
少女子ら流しお遣りそ
山の井ゝうかぶ木の葉は
立田姫のこせるかたみ

秋れかあゝみ

消えぬ間の霰をのせて
はしり舞ふさまもおもしろ
いざや子らこゝまつどひて
拾ひ来し落栗やきて
しばらくの秋をながめよ
ちづかなるわが山里の
秋れおごりを

夕雲

くちなしの
裾うちかけて山の端よ
しむし休らふ黄昏は

浮世の戀れおもかげを
あつゑて畫くヒが姿
獅子や舞ひ
龍をおたふし神れゆく
橋已たしゝもわが工
あらし狂あとの青空に
かゝる命のおもしろさ
足もゑの
山をなかばのうす紅葉
かゐみゐおきていざいおん

わが故郷い霧のおく
鹿の音とほく響くかた

あられ

芝生ま落ちてはしりまふ
いきほひたけ紀玉霰
ふき〳〵白くつえるまで
あおはや色はきえ失せぬ
すぎし名譽の花に似て
たゞよむうかぶ池水の

落葉ふをどる玉あられ
しばしとまりてなほ遊べ
あおはや波ま消え失せぬ
さだえなき世の〔ゆ〕きまま似て
おぼろ月夜まちる花の
すがたを見せてふる霰
むろひあつえて贈らんと
うくる袂ま消ゑ失せぬ
戀しき人のかげふ似て
空ふたゝかひ地まさけび

あられ

はろびくだけてふる霰
勝つも負くるも隔てなく
同じ枕よきえ失せぬ
わかき心の愁に似て

松の末葉をいのちよて
わづらはれこる玉霰
くだりしをりの時の聲
ふづこの胸に眠るらん
よらいあそびの夢ふ似て

のとそれ琴

わが母いづくよゆきし
手よふきし琴をみすてゝ
わが母いづくにゆきし
彈きおきし琴をのこして
塵はらふ人もなければ
こゑたえて日い重おりぬ

片言よくりかへしたる
わが歌を汝もわすれじ
ほゝゑみし母のおもゝげ
汝が面ふいまもうつれり

なつかしき指ふひかるて
うごきしいあいるまあの糸

壁ゑ立ちのこれる琴よ
えろやもゑ汝も忘れど
朝夕ゑむかひし影を
目ゑ何はる愛のひのりを
花も散る鳥もよし行け
わが母の歌聲かへせ
月白し空おもしろし
わが目ふい霧こそのゝるを

春も来ぬ山もゑらひぬ
わが胸そこほりぞとけぬ
ふかゑせん母なきやどを
いかゑせん聲せぬ琴を

千鳥

夕風ふ吹きゑけらるて
さわぎたつ波間の千鳥
子ゐ親のあと追むかねて
遠近ゑよびかゐすらん
我もまた父まちうねて

磯ちかく立つぞ久しき
　　在よ千鳥あれきい同じ
　　つばさもて父を迎へよ
朝月夜すがたうつして
　　鯛つりまいでたる父い
夕日影くもにきえても
　　かへる来ず舟だま見えず
折る返り岩うつるみい
　　はらさに響きて寒し
いづかたまいま浮ぶらん
　　やよ千鳥わが待つ心
　　ゆきてつたへよ

かへらぬ影

　　この頃影
木の間より夕日もるい
　　織り掛くる水の文
みどり伏す草葉を撲ちて
　　ひかれ逢ふ波れ雪
おもしろの小川の姿
　　忘れんとをれども去らず
それ色いわが胸ふ
　　その聲いわが耳ま

薄霧ふかかば沈みて
くれのこる寺の塔
こゝかしこ色づく木々の
照り返をゆふげしき
わが心いまもさまよふ
入相のおゑをしるべゐ
見し夢ゐのこるなり
聞く聲ゐなほうつゝ
謠ひつゝ野路のかたより
聲々よかへる子よ
過去もおく未来も知らぬ

汝が時のうつくしさ
追風のゐほふぞ何ゐ
花の香のちりまじり来て
女郎花ふぢばかま
おもかげゐよそおれど

少女れ死

一嵐こずゑふすぎて
初花のゐろもとゞ充ず
宵れ雨くもよりおちて
見えそ充し月もかくれぬ

あゝ君い月か花か
春ふかき雲かりのこして
のぞみのまして

霞たつうみのあなたゝ
君すむとたのみをかけて
雲のみち雁のゆくへも
おつかしく眺免しものを

玉章もゆかぬ里ゝ
うつそぬやいふい真か
きくい真か

父母ゝおどてかきをを
しばしといひさと免ざりし
ひとりゆく旅路もかなし
のこさるゝ此世もさびし
そらゝ飛ぶ星とみえて
消えしづむはかゝの君や
何はきをの影

冬の月

我はむかしの春の月
我はきのふの秋の月

つゝねゐ變ゐらぬ影なれど
世界そゐつゐか老いまけり

白妙ひろき園のうち
いづこゐ影を休らへん
そよ吹く風ゐさそはれて
花ゐあそびしおぞろ夜ゐ

あふるゝ戀をうつたふる
少女の歌もきゝつるゐ

ゆふべの窓ゐ讀みのこす
それ玉章も我ゐ見し

時々あぐるゑみれ眉
へだてぬ影に我ゐ見し
寵おぞろふる庭の菊
そのさかりをも我ゐ見し

馴ゐて訪ひよる高殿の
ひとり時めくともし火の
はしる霰のうし汐より
廊下を走ぐるさびしさよ

ねやもる光ほそゐゆく

堤の木の間あらはれて
　　したしく向ふ水の面
いまは靡伐かくしつゝ
　　氷の底ふねむれども
我こそまゐき来んの春の
　　歌ををむる海が胸を
麓よりそぐかりびをを
　　おくりし何との谷の空
反響よ吹ゆるおわかみは
　　我なぐさむる音楽か
落葉ようづむかけ橋を

嵐ぞふたりうちゐたる
天ぎる雪ぞたゝかひし
　　波ようたれて碎けてえ
うらみも敵も知らぬ身は
　　光しづかゐるちふのみ
くまおき海よゐが舞臺
　　いかれる海よゐが旅路

冬の月

我はおよひの冬の月
　　我は来んの世の春の月
神代のまゝの影なれど

世界ゐまたも若やがん
かすみれ衣よたゝまれて
高嶺のどかゐ立たん時

春れ字た

舞ふつるのつばさ隠き顯きて
一峯しろきはるのとほ山

また

ながきよる芦れ古根をよすがまて
一むら伺をむはるのわか草

また

庭鳥のしづが軒端ふとさつくる
こゑ伺たゝかに霞むそらかな

また

山まどれ楓のゑゐ葉あめみえて
春さびしくもかれるころかな

夏のうた

瀬をはやみ月もくだくる谷川ま
一聲まぐるやまゐやゝぎを

夏のうた

また

夕立のあらひすてゝある青ぞらは
涼しくのこる富士のたかやま

秋のうた

秋風よ吹きよせらるゝは洲の
芦間をひとつゆくわたるかな

また

うすれゆく波の日影ゆかたをせて
一をぢわたるあきはゆふ風

また

秋風ふまかせはてたるわがまはゝ
おぼるゝ種の數もさだめず

また

あすさかん菊のつぼみもかずそひて
雨たのもしきゆふぐれの庭

また

散りきていまた流るゆくもみぢ葉は
みぎはの夕日うかぶまもなし

冬のうた

冬のうた

朝月夜しかのふしどもあらいれて
かれの丶尾花霜まふすおり

また

いそでらのともし火さむくふくる夜ま
岩ます波のまゑばかりして

雜のうた

軒ちかく流る丶星のかげあをし
ねざめやいかふ遠方のそら

また

舟人の友よぶこゑもあいきおり
みなと入江のあめのゆふぐれ

また

浮きしづむ敵もひとせき石橋の
山松が枝ふあき風ぞふく

また

風ひとりいくさの聲をしらぶおり
月をあるゞのおろの高殿

雜のうた

小兒の病を居けるあろ

ゐがひさゐ頭えたせてうちねむる
ちごのおもわのかくも痩せけるゝ
さとしてもまごさいしらぬ幼兒ゐ
くすりの湯をるおやのくるしさ

旅日記の中を

江れ島のともし火あをくくれはてゝ
片瀬よおつる夜あらしの聲

また

折れかへる波をかすめて飛ぶ鳥の

つむさふさはる島かげもゐし

また

何をこえん箱根の山の杉のうへゝ
かすみてかゝる春の夜のつき

また

谷川のおとよりほかゐ友もゐし
山またやまの何けくれのそら

また

村雨の木々うつおゑも神さびて

ゆふぐれすごき木曽の山ごえ

六十

明治二十一年十二月二十日印刷　版權所有
仝　年十二月二十一日出版　定價十五錢

東京牛込區市ヶ谷仲ノ町四十番地
編者　大和田建樹

東京日本橋區通塩町八番地
發行兼印刷者　宮川保全

仝所
發行所　中央堂

高等師範學校教諭　大和田建樹先生
高等師範學校助教諭　奥好義先生　同選

●明治唱歌　第一集　定價十二錢　郵税六錢

日錄　新年●春の歌●鳥の歌●春風●暮春●遊歩の庭●學の力●勸學の歌●共に學びし●二月の海路●ふるさとの山●紀元節●家にいるん●日本男兒●皇國の守●母ゐき吾屋●故郷の空●別れの歌●千里の友●草苅の歌●けふる友●鏡槽の歌●別れの血しほ●若竹若松●朝雲雀●旅の暮●沖と磯●天長節●クリストマスの歌

●明治唱歌　第三集　明治廿二年五月發行

高等師範學校教諭　大和田建樹先生
高等師範學校助教諭　奥好義先生　同選

●明治唱歌　幼稚の曲　定價十錢　郵税四錢

明治廿二年一月一日賣出し

これは獨乙、英吉利の幼稚園唱歌集の内より奥先生の撰バれたる譜に大和田先生の歌をつけられたる書あり

高等師範學校教諭大和田建樹先生著

●いさり火　定價十五錢　郵税四錢

明治廿二年一月一日賣出し

これハ大和田先生が明治唱歌その外の雜誌等にもまだ載せられざる新趣向の近作をあつめて一冊とせられさる長篇の歌集あり

高等師範學校助教諭奥好義先生編

●進行曲

定價三錢
郵税二錢

右ハ諸學校ニ於テ生徒ノ運動進行ヲ爲ス際「オルガン」「ピヤノ」「バイオリン」等ヲ以テ奏スルものなるが未だ此種類の書出版おきに因り不便少からざりしに今此適切なる樂譜四種の撰述あり其益鮮少おらざるべし

式部次官從四位勳三等男爵高崎正風先生作歌
式部職樂師兼東京音樂學校教員上眞行先生作曲

●忠愛唱歌 將碁之盤

定價金貳錢　郵税金貳錢
明治二十二年一月一日賣出し

洋琴伴奏附（アッコンパニメント）

本曲ハ小學兒童ニ忠君愛國ノ志ヲ養ハシムルノ一助トセンガ爲メ男爵高崎正風先生ノ作ラレタル唱歌ニ上眞行君ノ曲譜ヲ附セラレタルモノニシテ昨年七月東京音樂學校ノ演奏會ニ同校生徒諸氏ノ始テ合唱ヲ試ミラレタル一大新曲ナリ今般弊堂作者ノ許可ヲ得テ出版仕候間小學校諸君ハ申スニ及バズ苟モ唱歌ニ志アルノ方々ハ速ニ一部ヲ購求シテ壯快ナル歌詞ト活發ナル曲節トヲ味ヒ玉ヘ

明治二十一年十二月

中央堂主人敬白

明治廿二年十二月五日

求メシ此一年余ニ達テ今日始メテ遂過安拙セリ

明治廿二年十二月二日雨中東京麻布

東町ノ寓ニテ　久三郎識

大和田氏ハ紀州ノ人ニシテ老和文ニ著名ト雖モ漢詩ニ美ナル感ヲ生ス可キ不知氏如何ナル霊魂ヲ此ノ新ノ新新ノ詩ニ入レタルヤ知ルベシ

体ヲ創造シ人ヲ知ルノ人ニシテ弘服々々